

2.20 倍, 3.18 倍, 血流量は 1.18 倍, 1.56 倍増加した。以上の結果より, AT-II 投与により適度の昇圧を得ることにより, RIS における腫瘍集積を改善することが可能であることが示された。

5. 高解像 ^{201}Tl SPECT による脳腫瘍の検出

——検出能に関する検討——

蔭山 昌成	瀬戸 光	清水 正司
神前 裕一	永吉 俊朗	呉 翼偉
森尻 実	野村 邦紀	中嶋 愛子
渡辺 直人	柿下 正雄	(富山医大・放)

CT および MRI にて脳腫瘍が疑われた 126 病変を対象に, 3 検出器型 γ カメラを用いた高解像 ^{201}Tl SPECT による脳腫瘍の検出能について検討した。腫瘍性病変 104 病変中 99 病変が Tl-陽性, 非腫瘍性病変 22 病変中 21 病変は Tl-陰性で, Sensitivity: 95.2%, Specificity: 95.5% と良好な結果を得た。また, 腫瘍最大径で 2 群に分けてみると, 最大径 2 cm 以上の腫瘍: 63 個中 60 個が Tl-陽性で Sensitivity: 95.2%, 2 cm 未満の腫瘍: 41 個中 39 個が Tl-陽性で Sensitivity: 95.1% と有意差は見られず, 小さな脳腫瘍の評価にも ^{201}Tl SPECT が有用であると思われた。

6. ^{99m}Tc -ECD dynamic SPECT を用いた脳血流量定量の試み

土田 龍郎	山本 和高	杉本 勝也
楊 景涛	秋吉 司	山元 龍哉
林 信成	石井 靖	(福井医大・放)
脇 厚生		(同・放医薬)

ECD の定速静注と dynamic SPECT により, 直接的な局所脳血流量の定量化を試みた。健常男子 3 例に対し, 10 分間の定速静注, 間欠的動脈採血と 1 フレーム 1 分の dynamic SPECT により得られたデータを Patlak plot を用い解析, Ku 値を求めた。Ku 値は ^{15}O - CO_2 steady state 法により得られた脳血流量 (rCBF) と比較した。直線回帰により, $\text{Ku} = 0.19 + 0.54 \text{ rCBF}$, $r = 0.85$ の良好な相関が得られた。本法による局所脳血流量定量化は可能であると考えられた。

7. 脳血流 SPECT における CCD 発現と MRI による深部白質, 脳幹部病巣との関係

李 松柏	中島 弘道	松村 要
竹田 寛	野村 新之	奥田 康之
中川 毅		(三重大・放)

脳血流 SPECT と MRI とともに施行した慢性期病変例で, MRI にて大脳皮質および白質に大きい病巣のない患者 15 例について, 小脳血流低下とそれに関する伝導路の障害との関係について検討した。結果: 皮質—橋—小脳路に病変があった 11 例の中, 7 例 (64%) に CCD が見られた, また CCD の見られた 8 例では 7 例 (88%) に皮質—橋—小脳路に病変があった。それにより皮質—橋—小脳路の障害と, SPECT の小脳血流低下との関連性が示された。一方, 皮質—橋—小脳路に病変があっても, CCD の見られなかった例も (57%) あった。今後 SPECT と MRI の分解能の向上により, 脳病変の形態的变化と機能的变化の関係について, より精密な検討が可能になると考えた。

8. Creutzfeldt-Jakob 病の 2 症例

——脳血流を中心に——

渡辺 直人	瀬戸 光	清水 正司
呉 翼偉	蔭山 昌成	森尻 実
野村 邦紀	中嶋 愛子	神前 裕一
永吉 俊朗	柿下 正雄	(富山医大・放)
谷井 靖之	柴田 良子	金 英道
倉知 正佳		(同・精神神経)
辻 志郎		(金沢大・核)

症例 1 は 65 歳男性である。症状, 神経学的所見および EEG より, 同疾患が疑われ CT および MRI を施行されたが, 特異的な所見は得られなかった。IMP による SPECT では左側頭頂葉の限局した血流低下を認め, EEG と一致した所見であった。症例 2 は 59 歳男性である。同様に症状, 神経学的所見および典型的な EEG 所見より CJ と診断された。CT では軽度の脳萎縮を認めた。MRI T_2 強調像で両側基底核に high intensity area を認め CJ 病の典型所見と考えられた。Tc-ECD による SPECT では, 半球全体に不均一で, 特に右側に血流低下傾向を認めた。EEG に一致すると考えられた。SPECT は CJ 病評価に有用である。